
偉人パラダイス

野球人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偉人パラダイス

【NZコード】

N3301Z

【作者名】

野球人

【あらすじ】

俺、杉下勇人は高校1年。いろいろな理由が重なり

織田の先祖と同居している。親もいなければそこまで特別に親しい友人もいない。

次々に現れる歴史的有名人の子孫を相手にするのは予想以上に辛かつた・・・。

『先祖』

君たちは昔の偉人たちを知つてゐるだろつか？この人たちがいなけば今この世はないだろう。

俺の名前は杉下勇人すぎしたゆうと、偉人の話をしているが別に俺の先祖が偉人というわけではない。

「ちょっとー！勇人まだー？」

「少し待てよ・・・」

こいつの話をするためにこの話をした。こいつは織田美長おだみなが少々めずらしい名前だがこれは歴史的有名人、織田信長の子孫で信長から1文字とつたらしい。

「遅いなー！学校に遅れるじゃない！」

「悪い悪い・・・」

「帰りに何かおごりなさいよー！」

「なんでそうなる・・・」

信長の性格を受け継いでいるのかけつこうせつかちだ・・・。しかしホントに時間がギリギリだ。

「急ぐか、遅刻する」

「だから最初からそう言つてるじゃないー！」

・・・朝からうるせーな

なんとか学校に間に合い、朝のHホーミームRルームが終わつた。ちなみに俺たちは高校1年、大東高校だいとうこうこうに通つてゐる。

「今日もギリギリね。ホント進歩なし・・・」

ため息交じりに言つてきたのは豊臣実理とよとみみのり、織田の次は豊臣だ。さすがに今は昔の家来の関係はないし、親友ぐらいの仲良さだ。

「あつ！実理ー！」

「おはよう、美長」

2人の話を聞きつつ俺は帰りになにをおじりされるのか・・・と考えていた。

特に今日は何も無く学校が終わり、いつもおり美長と家へ向かっていた。ちなみに俺たちは俗に言つ「幼馴染」というやつだ。

「さすがに少し寒くなってきたね～」
と美長が言い出したので俺も答える。

「そうだなあ、さすがに10月、もうすぐ11月だからな」
そろそろ夏服しまって冬服にしなきゃだな～

「・・・勇人？」

考えていた俺を美長が見ている。つていうかこいつ小さいなあ～、
150cmあるか？ぐらいだし。・・・知つてたけど。

「」、今度は何ジロジロ見てんのよ

「いや～、美長はやっぱり小さ～～～
ドガ！」

「ぐつ～？」

いきなり俺の腹部に激痛が走った。なに?とー?

「小さくて悪かつたわね！」

美長はなぜか怒ってしまった。身長が低いことを気にしてたつけ?
というか身長のこと言つたのになぜ胸を手で覆つているんだ?

まだ痛む腹をかばいつつ帰宅。

「ただいま～」
と俺。

「ただいま～」

と美長。なぜ美長がただいまなのかは、深い、深い、ふか～い事情
があるので。で結局俺と美長は
『同居』という形になっている。このことがクラスの連中にバレる
と少々、というか普通にやっかいだ。

この織田、性格はあれだが見た目は・・・まあ俺が言つのもなんだ
がすごくかわいい。普通にそこらの雑誌に載つてゐるモデルよりか
わいい。小さいからキレイというよりかわいいのがいいと思つ。

「ねえ勇人、今日のご飯何?」「

「ん?今日は・・・何がいい?」

まあ何かはわかつてゐけど・・・

「グラタンがいいな!」

「はいはい・・・」

やつぱり・・・こいつに聞くと絶対『グラタン』だ。

「早く作つてよ!」

ちなみに家事は全て俺がやつてゐる。さすがにもう高一なので洗濯
物ぐらいは自分でやつてほしいんだが・・・
もう一つ。美長の家事スキルは0に等しい。前にゆで卵を作らせた
ら電子レンジが大爆発を起こした。

なぜレンジなのかは予想がつくだらう・・・

俺がグラタンを作つてゐる間、美長はと黙つて・・・自由そのもの
だ。好きなTVを見たり、ゲームをしたりと遊んでゐる。まあそつ
ちのほうが静かでいいんだけどな。

そろそろできるから食器などを美長に用意してもらおう。
「お~い美長、そろそろできるから準備して・・・」

「スースー・・・」

美長のやつ寝てるし・・・。こいつ寝るとホント美少女だなあ。・
・・何も言わなかつたらだけど。

などと考えていたら・・・

「ん~、ふあ~」

かわいいあぐびと共に美長が起きた。そして俺の顔を見ている。

「・・・何よ」

急にしゃべられたので俺はびっくりして・・・

「い、いやにも・・・じゃなくて!夕食できただぞ?」

しかしずつと一緒に住んでたからあんまりわからなかつたけど、最近美長つて急に女っぽくなつたよな・・・
胸のほうはまだまだだけど・・・

「ふつ！」

「ぐはつ！」

いきなり溜めのフックを俺に決めてきた。なんだー？

「な、なんだよ・・・」

「いやらしい田でどこ見てんのよ・・・？」

少し顔を赤らめてこっちを見ている。俺つてそんなにいやらしい田をしてますかね？

「どにも見てねーよ！それより早く食卓につけ

「うん」

はあ～、せつねと食べよ・・・

食べてる間、美長と今日あつたこと・・・と言いつてもほとんど同じ行動しかしていないのでテキトーな世間話をしていた。

「それでね～、実理がね・・・」

俺が作つてやつたグラタンを食べながら学校で聞いたウワサ話をしている美長。ホント楽しそうだな。ここで一つ疑問があるだろ？
家事は全て俺がやつていると言つたが親は・・・いない。俺の両親は俺が産まれて5年後に事故で亡くなつた。新しい薬品の開発の仕事をやつていたのだが、その研究所がなぞの大爆発を起こした。爆発の原因は今もわからない。なにしろ研究所が全部ふつとんだからな。まあ今となつてはどうでもいいことだ。

「ねえ、聞いてる勇人？」

「ん？ああ・・・」

「ちゃんと人の話聞きなさいよね！」

「はいはい・・・」

お前が言つことか？と思つがもちろん口に出さない。またフックを

くらいたくないし・・・。

「「」ねそつせま～」

「「」ねそつせま」

2人して食べ終わったので食器を片付ける。洗うのは・・・もひむりんこの俺だ。

「お～い美長、先に風呂入れ」

「は～いよ」

よし。さつせと美長を風呂に入れて俺はゆつくつしよう。女の風呂は長い・・・と畳つか美長は長すぎる。1時間以上なんて普通だしな。

「ふ～、少し寝るかな・・・」

ソファで寝転び目を閉じた。

・・・それから何分かたつたころに

「つきやー！」

「！？」

な、なんだ!? 美長の声は・・・脱衣所から、か? イヤな思いに出しがないがとりあえず行くか・・・

「お、おい! どうしたんだ! ?」

脱衣所の扉の前(とうぜん閉まっている)から声をかけると・・・

「ゆ、勇人ー! !」

「！？」

な、なんと裸の美長が飛んできた! なに! ? とー?

「な、な、なんだよ!」

「む、む、・・・む」

なんだ? 『む』? こいつ壊れたか?

「虫! があ! いるの!」

あ～、虫か。こいつ大つ嫌いだったな。とその前に・・・

「おい美長、いつまで俺にだきついてんだよ・・・」

「? ・? ・?」

一瞬考え込むなよ。美長はバツと手を離し、その場にへナへナと座り込んでしまった。

「虫つてどこだよ・・・?」

つてか女のシャンプーかなんかの香りがしてイヤなんだが・・・すると「ソソソソ・・・

「?」

クモ・・・だ。しかもすゞく小さい。虫つてこれか?

「・・・」

俺はパタパタとクモを逃がすように窓に追いやつて外へ出す。美長はと言うと、座つてボー然としている。

「おい、もう大丈夫だぞ」

「え?・・・あ、うん」

「つてかな、あんな小さいクモなんかで大声出すなよ
近所迷惑だろ?」

「大きさは関係ないでしょ!あんな、む・・・昆虫を私のお風呂に入れないでよ!」

大きさ関係ないならあんなに驚かなくていいし、虫と昆虫を言い分ける必要があつたのかと思うし、そもそも俺ん家の風呂だし、とまたたくさん言いたいことはあるんだが・・・

「美長。いろいろと言いたいことはあるが2つ言つ

「な、なによ」

座つたまま美長は「つちを見上げてくる。しかも少し目が潤んでる。

・・・そんな目でこつち見るな。

「1つ・・・まず服を着るかバスタオルをつけてくれないか?」

「!!」

ガス! ドン! ピシャ!

俺が殴られ 壁に激突 美長がドアを閉める音

・・・いつでーな。こつちは見ないよつに必死でお前から田を反らしていたのに。

「あと1つ・・・」

「な、なによ！」

これはこれで大切だから言つておいた。

「クモは昆虫じゃないぞ？」

「今、言つことかあー！」

「パン！」ドアを開き、俺に飛び掛つてくる。おい！や、やめろ！

「私はてっきり謝るとか、心配してくれるとか思つてたのにーーー！」
な、なんだこいつ！？言つてることが意味不明だ！しかもあわてて

着たのかパジャマが・・・すごくわざわざい感じになつてるぞ！？

「お、おい！美長！」

だ、ダメだこいつ何も聞いてねえ！今、美長は小さい体を生かして倒れた俺に乗つかつて叩いている状態だ。そして暴れています。

・パ、パジャマが

「美長っ！」

大声で言つてもまだ続けるので・・・仕方が無く俺を殴る美長の両手首を持つてひっくり返す。結果的に俺と美長はさつきと逆の位置になつた。なつてしまつていた・・・。

「あつ・・・・」

そして今、俺は気付く。俺は美長の手首を押さえつけている。対する美長はもう半泣き、というか泣いてる。一言で言つと俺は美長の上に乗つかつて美長を床に押さえつけているのだ・・・。

「あ～、え～とこれはだな・・・・

なんとか弁解しようとする俺。しかし・・・

「し、死ねーーー！」

見事に右ストレートが決まつた。俺には弁解するチャンスも無いんですか？

「くつそ、いてて」

俺は氣絶していたらしい。今は深夜の2時。ずっと脱衣所の前で倒れていたのだけつこう寒い。

「ソファで寝るか・・・」

今さら寝室へ行く氣にもならないのでソファに向かつ、が先客がいた。美長だ。

「はあ・・・」

ため息をつきつつそばへ向かつ。美長は小さく毛布に包まっていた。そして頭をなでてやると・・・

「ふにゅー・・・」

こうして見ているとなんか妹みたいだな。こんな凶悪な妹はいないと思つが。そしてそのまま俺もそばに眠つた。

『先祖』（後書き）

初めて投稿させていただきました。野球人です。
書くのは予想以上に難しくいろいろと試行錯誤をしました・・・。
しかし読んでくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。
更新は遅いと思いますがよろしくお願いします。

・・・みんないりつこりうシチュートーションはどうだらう? 幼馴染の美少女がとなりで寝ていて、起きるなり『おはよ～・・・』とかわいい声で言つてくれる。それは全国の男子が一度は望んだことのあるシチュートーションだらう。・・・しかしその幼馴染で美少女が『ハツ!』とした顔になり、鬼人の』とくボコつてきてあげくのはて縄で数時間しばられたら。・・・シチュートーション不成立としか言えないだらう。と言つわけで休日の朝は始まった・・・。

（数時間後）

「というわけで実理たちと遊びに行くことになつたの

「へへ、そうなんですか・・・」

「最初は家だつたんだけさすがにバレたらまずいじゃん?だから変更したの。よかつたよね?」

「はい。それはもう・・・」

「やつぱり! さすが私ね!」

「さすがでござります。といひで・・・縄ほどいて

「ヤダ」

「くつそーーー!」

なんで俺がこんな目にあわなきやなんねーんだよ! ・・・理由は実のところわからん。

・朝、俺と美長は2人で目を覚ました。

・美長はソファの上、俺は下で寝ていた。

・・・この2つでなぜこんなにキレイなんだこいつはーわけがわからん!

「じゃ、夕方にはもどるからね」

「あーちょ・・・縄ほどいて・・・」

ガチャリと、扉が閉まり俺はつるされたまま放置された。

なんとか縄を抜け出せたのは約5時間後・・・

「いや〜、あいつがいないと家も平和だなあ〜」

けつこう久しぶりに1人になれた俺は思わず本音を言った。その後はTVを見たりPCをいじつたりと自由に過ごせた。

すると5時もまわった頃・・・1通のメールが届いた。送信者は・・・

・美長。

『急いでどつかに隠れて！理由は時間がないから後で！』
のこと・・・よくわからんが必死さが伝わってくる。ひとまず言われたとおりにしよう、と思い俺は押入れに入った。

その後・・・

「へ〜、美長ん家始めて来たけど・・・案外フツーね」と、あきらかに美長とちがうセリフ。この声は・・・み、実理！？なぜあいつが！？少し戸を開け外を伺う。

「あ、ごめんね美長。いきなり・・・」

「う、ううん。全然いいよ！」

あはは・・・と苦笑いしている美長。なんもよくねーよ。こつちはそのせいで狭くて暗い押入れに入ってるんだからな。

「じゃ、ちょっとお風呂借りるね〜」

と言つて実理は風呂へ言つたようだ。なぜ人の家で風呂？と思いつつ一回押し入れから出ようとしたり・・・

「み、美長！？」

実理の驚いた叫び。あわてて出しけた体を押し入れに戻す。

「な、なに！？」

脱衣所での会話を聞くことにした。

「あなたって確か・・・1人暮らしよね？」

「う、うんそうだけだ・・・」

あいつ、隠し事とか苦手だから大丈夫かな・・・?
「な、なんで男物の下着があるわけ・・・？」

「！？」

し・・・しまつた！洗濯物を干しつぱなしだつた！これは最初から
やばいぞ！と思つてゐると・・・

「そ、それは・・・」

なんとかごまかそうとする美長。

「それは・・・？」

それは・・・？」

「しゅ、しゅみ、そう！私の趣味！」

「！？！？？」

もう一度言う。美長は隠し事が苦手だ。つてあいつテンパつてわけ
わからんことを言い始めたぞ！？

なんだよ男物の下着を集めるのが趣味な女子つて、ありえんだろ。

なんとかさつきのピンチを切り抜けた美長は今だ微妙な顔をしてい
る実理と一緒にリビングへ来た。

しばらくは平和に女子同士でしゃべつていた。するとやはり女子、
ガールズトークの定番。恋愛の話をしだした。俺はこういうのは苦
手だし、盗み聞きしてゐみたいでイヤなのでなるべく聞かないよう
にした。しばらくそうして押入れの中にあるとなにやら話しおのネタ
でハイテンションになつてきた実理がこんなことを言い出した。

「そういうえば美長～、あんた身長あんまり伸びないね」

「うん・・・、なんでだろ・・・」

実理も高いほうではないが美長よりは高い。すると・・・

「胸も成長しないね～」

なんて会話だよ

「う、うるさい！私は・・・人より少し成長スピードが遅いのよー」

またイヤな会話をし出したな・・・と思つてゐると。

「うりやー！」

「ひやわ！」

な、なんといきなり実理が美長の胸をさわりだした！女子同士の口
ミコニケーションと聞いたことがあつたが・・・ホントだったとは
（？）

「ちょ、ちょっとやめてよ！」

「いいじゃんか～、女同士なんだし」

いやらしく笑う実理。手つきが女っぽいぞ・・・。と思つてたら後
ずさつた美長は押入れ（俺の隠れ場所）の方に来た。つていうか、
つつじんできた。おい、まさかこれってやばいんじゃ・・・

「ひやー！」

「美長！？」

グシャっと押入れの扉が壊れ・・・

「・・・勇人？」

「・・・こんばんは」

バレちまつたよ・・・

『口説の日々』（後書き）

野球人です。更新はとてもバラバラで1日に何回か更新することもあります。あればしばらくしないこともあります。申し訳ありません。この『偉人パラダイス』はまだまだ続くのでよろしくおねがいします。

『3人で・・・』

（事情説明中）

「「と言つわけだ（なのよ）」」

2人同時に言い終わる。

「へへ、な～るほど・・・」

なにか変なことを言い出しそうな雰囲気だつたので

「ところでなんでお前は言えに来たんだ？」

美長はなぜか真っ赤になり固まつていて「ご本人に聞いてみた。

「実はね、私の両親が海外旅行に行つてそこで飛行機がなにかのトラブルを起こしたらしくて・・・」

「それはまた大変だな・・・」

「で、同時にストライキとかなんか起きちゃつて年単位で帰つてこられないの」

・・・ほんとに大変なことになつてゐるな。

「うわ～・・・両親は無事なのか？」

「うん。まあ治安の良い国だし、ホテルも無料になるからつて向こ

うに泊まるみたい」

ずいぶんとのん気な親だな・・・。まあ無事なら安心だ。

「そのことを美長に言つたら『私の家に来なよー』って言つから・・・」

・
けつぎよく自分のせいじゃねーかよ。美長。

「で、美長。けつぎよくどうすんだよ」

「どうつてなによ・・・」

こいつは話を聞いてなかつたのか？まあいいや。

「実理1人を家に帰すわけにもいかないしな・・・」

最近はなにかと物騒だ。しかも今はなんやかんやで1-2時を回つて

いる。女子を一人で帰すわけにもいかない。

「私のことは気にせず。2人の邪魔なんてしないからだ」

・・・またこいつはそういうことを言つし

「そ、そんな！実理！私の家に泊まりなよ！」

俺の家です。

「私にはそんなことできないよ！」

なんか実理がのってきたし追い返して皆にチクられてもあれなので・

・・

「おい、実理。泊まつていけ」

仕方がなくそう言つてやつた。なんとなくイヤな予感はしていたが・

・・

「え！いいの？ありがとう勇人！」

・・・なんかこいつ『計画通り』みたいな顔したぞ？

「じゃお言葉に甘えて〜」

ここ、杉下家はもともと両親と俺の3人で暮らすつもりだったのでそれなりの広さはある。しかし3人ぐらしになるとはな・・・。

『3人で・・・』（後書き）

今回も読んでくれた人ありがとうございます！
進むのが遅くてすいません。

学生なので土、日しかたぶん更新ができないと思いますが
お願いします。

気軽に指摘、感想をお願いします。

続・苦惱の日々

杉下勇人の今までの一曰は、いつだつた。学校のある曰は自分で起きれない美長を起こし、一人ぶんの朝食を作り登校。休日はテキト一だ。しかし・・・。
なぜ一人増えたらキッチンが吹き飛んでるんだよ・・・。

「・・・」

「えへへ・・・。失敗」

「えへへ、じゃねーよー」

理由を聞くとキッチンで理科の実験・・・もとい料理をしていたらしいんだが。

(どう見ても理科の実験じやないか・・・)

と言つわけで今週の休日一日はいきなりキッチン爆破というありえん現象からはじまつた。なので昼、夜はファミレス、朝はパンになつた・・・。

「で、お前らは何を作ろうとしてたんだ?」

「ベーコンエッグ」

「どう考えたらあれでそつなる?」

卵とベーコンはあつた。しかし理科の実験でしか見たことないような薬品が並んでたよな?

「はあ・・・。これから不安だ・・・」

ファミレスとか以外は何するかつて?たぶん女子一人にいろいろ連れ回されるだろうよ。ハハハ・・・。

「そろそろ帰ろつか」

と、実理が言つたので俺たちもつなづき会計を済ませ(俺が全部払う)キッチンが爆破された家へ帰る。

続・苦惱の日々（後書き）

更新が遅くなりすいません。

またも自己都合により短くなっています。

しかし！これから波乱の展開へのステップだと思い（？）お許しください。

では感想、ご指摘、お待ちしています。

続々・苦惱の日々

「あ、私、買いたいものがあつたんだ！」

実理が言つたので美長が

「じゃ、私も行く」

と言つので俺も行くのか・・・と思い振り返るが

「あれ？勇人も来たいの？」

なんて言つてきた。できれば行きたくないんだが？ふと実理の顔を見ると・・・わ！絶対なんかたくらんでる！

「い、いや。俺は先に帰ってる」

「そお？別に来たかつたら良いのよ？」

・・・こいつ。女じやなかつたらしばいでるぞ。まあ一人を見送り俺は家へ向かう。そういう前は下着売場に連れてかれそうになつたつけ？

俺は久しぶりに一人でゆつくりすごせた。あの乱暴娘×2が帰つてくるまで何しようか、と思つていたら寝てしまい起きたら夕方の六時三十分。貴重な時間を少し無駄にしたようだつたがたまには良いが。

「たつだいま～！」

「おじやま・・・ただいま！」

お前はおじやましますで良いんだぞ。実理。

「もう！こんなところでゴロゴロしないでよ！」

ガスツと俺をソファから蹴飛ばす美長。そしてそこへ自分がそこへ寝ころぶので余計にむかつく。

怒らないのかつて？そりや・・・。怒りたいよ？怒つても仕返しがこなければ・・・な。

続々・苦惱の日々（後書き）

本日2度目ですが短いです。
いつもすいません・・・

ボーイ

俺の家では代々、女の立ち位置が・・・。たとえるならスライムと魔王くらい?違ひ。そのことに悲しんでいると

「何? その顔?」

「性格のじょぼさが顔に出た?」

がまん、がまん・・・と思いつつ、夕食はまたファミレスに向かつ。

～ファミレス内～

「そういう街ですか?」いかつといい人いたよね

「うんーかつ」ついで言つたが、『美少年』って感じの子

「はあ? 美少年?」

美少年とかつっこにはちがうのか?

「うんうん。ぱっと見は女の子だよねー。」

「でも、どつかで会つたような・・・?」

「なんだ? 会つたことあるのか?」

俺は美長にたずねる。

「ん~。確かに勇人も居たような・・・?」

「そりゃそりゃ。ほとんど一日中いつしょだからな」

「でも、わかんないなら考へても仕方がないんじゃない?」

仕方がないんじゃない?じゃねーよ。美長なりに必死で思い出そう
と・・・

「やうだね! もう帰ろつか!」

「・・・。」

帰り道も一人の女っぽいその美少年の話を聞きながら帰る。

「美長! 今日こっしょにお風呂入つていい?」

ボーイ（後書き）

終わり方がなんとも微妙な・・・w

こういう展開が苦手な人はすいません。

次は少々こういうのが入ると思われますが一時的なのでご安心ください！

では、ご指摘、ご感想お願いします！

学校で・・・

「え？ いいけど・・・。なんですよ、

「私には美長の成長を見なければならぬのです！」

「ちよつ・どじ見て言つてんのー？」

「・・・お二人さん。せめてそういうのは俺のいなこといつどお願ひします。

「勇人さん？ のぞきはいけないよ？」

「のぞかねーよ・・・」

正直、こいつのこいつのこいつのは慣れてしまつた。いけないことなのはわからん。

「え～。だつて興味があるんでしょ？」

「はい？ 何に？」

「美長の体に」

言つておくがあつません。

「まあ、とにかく俺にほやうこいつ興味は無いし、別に見たつて何の得にも・・・ぐは！」

「何？ 得があつたら見るわけ？ ん？ なんか言いなさいよ」

腹部にめりこんだ美長の拳。次は・・・首絞め！？ 死ぬつて！

「何黙つてんの？ 言いたい」と、あるんじやない？

「・・・！ ・・・！ ？」

「美長。首」

「あ・・・」パツ

「ぐえー！」ドサ

と、まあ 美長の恐ろしさはこんなもんだ。身長は小さじし、筋力自体も女子の平均なんだがスピードと技に長けている。その後は特に何も無く明日の学校へ備えて早めに寝た。

（翌日）

さあ、月曜日。気持ちを入れ替えて無理だよな。まだ俺の体は完治していいし……。

美長たちは昨夜に引き続きその『美少年』の話をしていた。あきないものなんだろうか？

いつも早起きな実理がいるおかげで（せいで）早く学校に着いた。自分の席に荷物を下ろすと・・・

「あ！あの美少年だ！」

「え？あ！ホントだ！」

美長と実理が言い出した。見たことあるつて・・・同じ学校かよ。

「ほら勇人も見て！」

「言つた通りでしょ？」

言われて見ると・・・確かに美少年だが・・・。あれは

「・・・朝日」

「！？は、はい！？」

その美少年は知り合いつていうかクラスメイトの横川朝日。よこがわあさひあまり活発では無いが一応、俺の友達の中で数少ない常識人だ。

「つてなんだ。杉下君か。今日は早いね。いつもギリギリなのに」

「ま、まあな

朝から本を読んでいたのかその本を手にニコッと笑顔を見せる。同姓とわかっているが少しドキッとしてしまう。

「あれ？勇人。この人と知り合いなの？」

「なんで言わないのよ！」

「言わないも何も同じクラスだろ

「「え！？」」

・・・バカか！いつら。まあ目立たないしな。それに・・・

「お前らよりおとなしいでででで！痛いんだけど！？」

「どうしたの？ こきなつせけんで？」

「へんな感じじゃない」

「」、「こいつは、朝日と見えないよ」と俺の足を踏み抜いてきた。

「そ、そろそろ皆が来る頃だよ～？」

何かに気付いたのだろうか、朝日は席に戻るよつとながす。

「そうね。じゃあまた。えーと・・・」

「朝日です」

「そつー朝日君！」

美姫。名前くらい覚えてやれよ。

学校で・・・（後書き）

さて。新キャラ登場です。しばらくはこの朝日君の話になると思こ
ます。

次の予定では少しづつ勇人たちのクラスメイトと学校をあきらかに
していこうと思います。

では、ご指摘、ご感想、お待ちしております。

クラスメイト

さて、^{ホームルーム}HRが終わり1限目は体育。体育でやったー！なんて言つてられるのは小学生までだ。

なぜこの寒い中半そこで、半ズボンで外に出なくちゃならん。とりあえず体育の筋肉教師こと山岡真斗先生ににらまれないうちに走つておくか・・・。

山岡先生がきしゃわやくじんなじとを書こ出しだ。

「えへ。まずある事件からだ。おい、問題児トライアングル（山岡先命名）前へ出ろ」

すると2人の男子生徒が立ち上がり前へ出た。
1人は身長185cm近くある佐藤光矢。さとうひょうや問題児トライアングルの

次は男子二つては小丙

次は男子にしては小柄な岡田義明。機械の操りに長けている。・・・

「あ、何して。」心が丸見えだからそれで

「はいはい・・・」

トライアングルのリーダーこと俺。だが三人の中ではダンツに点数、成績は良い。（ていうか2人がダンツに悪い）なぜリーダーになつたかといつと・・・。たぶん入学式のことを覚えられてるからだろう。

「さて。本題だ。今日女子更衣室からこんなものが見つかった」と言つて山岡先生がポケットから出したのは黒い小さな物だった。

「…では…?」

「とハモ小型カメラシ」

「それっていけないんじゃ・・・」

素直に俺はそう言った。ちなみにこれは俺の物ではもちろん無い。

「ああ、杉下の言つとおりだ。リーダーのことはきちんと聞かなくてはな。なあ、岡田」

「！？」

本人はバレた！？的な顔をしているが俺は小型のカメラと言われた瞬間わかつたぞ。こいつはそろそろ警察に行つたほうがいいと思う。公共の福祉として。

「さらに女子更衣室の床に小さな穴が空けられていた」

山岡先生が写真を見せる。そこには更衣室の隅に小さな穴が空いていた。どうやら更衣室の外から掘られたものらしい。

「・・・これは？」

一応聞くと

「うむ。バカな誰かだらうな。なあ佐藤」

本人はバレた！？（以下略）

「で、この2人はどうする？リーダー？」

俺はめんどくさいので・・・

「あ〜、煮るなり焼くなり好きにどうぞ」

「うん、それは助かる」

「てめ！裏切り者！」

と佐藤。

「・・・ひどい」

と岡田。佐藤、岡田。俺はお前らを裏切つてないぞ。元から仲間じや無いしな。

「お前らはこつちだ」

「・・・」

2人はだまつて生徒指導室へと連行された。普通は職員室なのだが、2人はこれが2度や3度目ではない。

「はあ・・・」

深くため息をつく。といつか俺は前に出される理由はあったのだろうか？

「いつも大変だねえ・・・」

「おう朝日。全くだ・・・」

とにかく体育は自習。体育の自習なのでまあ休み時間のよつなものだ。

クラスメイト（後書き）

続々と新キャラが出てきましたね。

実のところ、問題児トライアングルは実在しましたｗｗ
というか僕だつたんですけどねｗ
もちろんのぞきなどはしていないのであしからず。

では次回は勇人たちが通う大東高校についてのお話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3301z/>

偉人パラダイス

2011年12月28日21時47分発行